

# イスラム世界概論

1. 「情報」のなかのイスラム世界  
なぜイスラムは「敵役」なのか？
2. イスラム世界とは
3. イスラムという宗教について(1)(2)
4. イスラムを生み出した風土(1)(2)(3)
5. イスラムと政治
6. イスラムと経済(1)(2)
7. イスラムとジェンダー
8. イスラム教徒の社会生活(家族と名誉・恥)

# 1. 「情報」のなかのイスラム世界 なぜイスラムは「敵役」なのか？

- (1) 繰り返されるイスラムをめぐるごたごた
  - (2) 「文明の衝突」か？
  - (3) 近代イスラム改革

# (1) 繰り返されるイスラムをめぐるごたごた

加藤 博

現在は沈静化したようであるが、今年一月から三月にかけて、イスラムの預言者ムハンマドを擁護する風刺漫画の新聞・雑誌掲載をめぐるイスラム教徒が反発した。彼らは掲載の中止と謝罪を求めたが、ヨーロッパの一部報道機関は「報道の自由」を理由として要求を拒否し、風刺漫画を掲載し続けた。そのため、イスラム教徒の反発は大規模な抗議行動や暴動にまで発展した。

おそろしく、この事件を前にして、一般の日本はなぜこのように起こるのかと首をかしげにしない。なかには、「大々な」とあざむいたものもいたであろう。なぜイスラム教徒は漫画ごときで血を頭に上らせ、ヨーロッパの報道機関は「報道の自由」など仰々しい口をもち出し、自分たちの行動を正当化してしまっているのか、というわけである。この感は、至極まことにである。しかし、当初、喧嘩両成敗の感覚を抱いていた日本人も、事態がエスカレートし、映像をめぐってイスラム教徒の暴動に陥る報道が多くなるにつれ、その多くがイスラム教徒の行動を批判的に見るようになっていったのではないかと想われる。このような「喧嘩」を締めて冷静に、中立的な立場から見るとは難し、とっついてこれまで培ってきた「通念」

## ◆◆イスラムと近代◆◆

# 「通念」で計れぬ文化摩擦

## ムハンマド風刺漫画問題から

かとう・ひろし 一橋大学大学院 経済学研究科教授。1948年、ムハンマド風刺漫画事件を経て、イスラムと近代の関係を論じた『ムハンマド風刺漫画事件』(東大出版)、『イスラム世界の経済史』(NHK出版)など。

でもって事態を評価しがたから、風刺漫画問題のよな、イスラムとヨーロッパとの間の文化摩擦が生じることは確実である。そして、野蠻でまは言われないもの、非近代的で宗教的なイスラム世界というイメージである。イスラム教徒のデロを含む、過激な政治行動

かとう・ひろし 一橋大学大学院 経済学研究科教授。1948年、ムハンマド風刺漫画事件を経て、イスラムと近代の関係を論じた『ムハンマド風刺漫画事件』(東大出版)、『イスラム世界の経済史』(NHK出版)など。

ムハンマド風刺漫画事件を経て、イスラムと近代の関係を論じた『ムハンマド風刺漫画事件』(東大出版)、『イスラム世界の経済史』(NHK出版)など。

が日々報道されるなかで、このイメージは強化され、とりわけ、二〇〇一年九月十日のアメリカ合衆国における同時多発テロ以降、日本人の頭なかで、イスラムという宗教テロが結びついてしまった。

その結果、なか寂然としないものの、ムハンマド風刺漫画問題においても、自分や日本をヨーロッパに近い存在とし、理解を超えな存在と思っているイスラム世界を遠ざける。今後、ムハンマド

私の著書「イスラムと近代」(講談社現代新書)は、このことを指摘し、執筆された。その目的は、イスラム教徒の主張を弁護するなめはない。イスラムと西欧との間の文化摩擦には、当事者ではない日本人にはなかなか理解できない、近代以降の長く錯綜した歴史を踏まわっているのだということ、一般の日本人に知ってもらいたかったのである。歴史を紐解くなかで現在を知るためには丹念で根気のある読書と

り、同じ文化伝統に立つており、宗教対立のように見える場合でも、彼らは抱負のものの考え方を分かっている。それゆえに、お互いのちょっとした違いに対して敏感に反発することもある。

第二は十九世紀以降の近代は、イスラム世界が西化し、少なくとも政治的には、植民地化された時代であったということである。私の著書が、イスラムでも西欧でもなく、日本自身の目で、イスラムと西欧の文化摩擦を見る、かけにされず願っている。

2005年9月  
ムハンマド風刺漫画事件  
北海道新聞

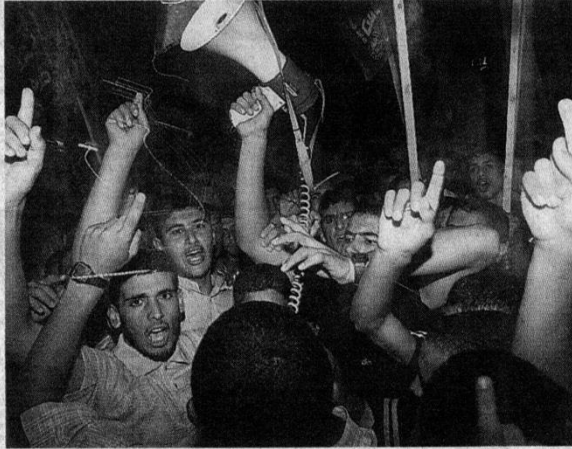
# 聖戦巡り「暴力は神の本質と両立しない」

# 法王 発言 イスラム反発



【ローマ＝郷富佐子】ローマ法王ベネディクト16世の写真がイスラム教の聖職(シハド)について批判的な発言をし、イスラム諸国に反発が広がっている。パチカンは14日、「シハド論議を意図したのではない」と釈明したが、各地のイスラム宗教指導者らは謝罪を要求。教会内には、イスラム教の預言者ムハンマドの風刺画が欧州の新聞に掲載され、イスラム諸国で暴動が起きた今年初めのような騒ぎに発展するのではないか、と懸念する声も出ている。

法王は母国ドイツを訪 分余りの講義を行い、14日中の12日、南部のレーン15世紀のビザンチン帝ゲンスブルク大学で30 国マヌエル2世パレオロ



パレスチナ自治区ガザで15日、ローマ法王ベネディクト16世の発言に抗議するイスラム過激派ハマスの支持者たちAFP時事

## 撤回・謝罪要求 相次ぐ

ゴス皇帝の「ムハンマドが新しくしたことを見せてみなさい。邪悪と冷酷しか見つからないだろ」という言葉を引用。「暴力による布教は論理的ではない。暴力は神の本質と両立しない」などと話し、聖戦を批判した。

これに対し、パキスタン議会は15日、「ローマ法王の侮辱的な発言はイスラム世界の感情を傷つけた」として、発言の撤回と謝罪を求める決議を全会一致で採択。エジプト最大のイスラム政治組織「ムスリム同胞団」のムハンマド・アキフ団長は、法王が謝罪しなければパチカンの外交関係を断絶するようイスラム諸国に呼びかけた。

パレスチナ自治区ガザでは15日、イスラム過激派ハマスのハニヤ首相が「法王発言は真実に反しており、我々の信仰心に火を付けるものだ」と強く非難した。

ガザでは同日、キリスト教青年組織とギリシャ正教会の建物がある一角で四つの小型爆弾が爆発。けが人などはなかった。法王発言との関連は不明。クウェートやイランなどでも、有力な宗教指導者らが「法王はイスラム教について無知だ」と非難する声が高まって

いる。法王は11月28日から12月1日まで、初のイスラム国訪問としてトルコのイスタンブール行きを予定している。しかし、ANSA通信によると、トルコ政府宗教局の最高責任者が「西側世界の経済力に支えられた者の高慢な態度を示した発言。悪意に満ちている」と述べ、法王訪問に反対する意向を示したという。パチカンは14日、「法王は宗教的な動機による暴力を明確に、完全に否定することが最も大切だと考えている。シハドやイスラム教の教義に関する踏み込んだ議論を意図した発言ではない」との声明を発表し、事態の沈静化に努めている。ただ、教会関係者からは「発言には常に注意深い法王がなぜ、イスラム原理主義への批判に踏み込んだのか」と疑問の声も聞かれた。

2006年9月  
法王舌禍事件  
朝日新聞

## (2)「文明の衝突」か？

- 私は、新時代における紛争はこれまでのようにイデオロギーや経済上の対立によって引き起こされることはないと思っている。むしろ私は、人類を隔て、紛争をもっぱら引き起こすことになるのは文化的な要素ではないか、と考えている。国民国家は世界政治における最も力強いアクターとして存続するだろうが、むしろ異なる文明下にある国家や集団によって引き起こされる**文明の衝突**が、今後の世界政治をめぐる紛争の主な要因になっていくだろう。**文明の衝突**がグローバル政治の支配的形態となり、**文明上の断層ラインが今後の紛争ラインになる**と考えられる。

(サミュエル・ハンチントン「文明の衝突」『フォーリン・アフェアーズ』1993年夏号)

# 欧米知識人のイスラム観

## ジョン・エスポズイト

- 21世紀は、ふたつの主要なかつ急激に増大しつつある世界宗教、キリスト教とイスラームの世界的な対峙と、西洋とそれ以外の地域との間の関係を緊張させるグローバリゼーションの威圧によって支配されるであろう

(『グローバル・テロリズムとイスラーム』明石書店、2004年、9頁)

## ラシュディー事件

- インド系イギリス人作家サルマン・ラシュディーは、1988年、幻想小説『悪魔の詩』を出版した。そのなかに、イスラムと預言者ムハンマドを冒瀆するような内容が含まれていたところから、イスラム教徒の激しい反発を買った。1989年2月、イランの指導者ホメイニーは、著者を含め出版に関係した者に対する処刑を宣言する。ここにいたり、事態は外交・政治問題へと発展した。

### (3) 近代イスラム改革

- 19世紀末から20世紀初頭にかけてのイスラム改革。ヨーロッパ列強の植民地主義に対抗するためにとられたイスラム教徒の自己改革運動。現在のイスラム世界における思想的、政治的運動の原点となった。

#### 近代イスラム改革

1. ムハンマド・アブドゥーの思想
2. 分裂するイスラム思潮
3. イスラム思想の大衆化



# 1. ムハンマド・アブドゥの思想

アフガーニー(1838/39-1897)



「時代の精神」ムハンマド・アブドゥ(1849-1905)



# エジプトの植民地化

## イギリス軍によって砲撃されたアレクサンドリア



1882年、英軍の上陸直後におけるアレクサンドリアのヨーロッパ人地区。英軍による砲撃の後、反英暴動が起きた。

## 信仰の危機からイスラムの危機へ ムハンマド・アブドゥの言葉

- 私は白状しよう。今日の我々のイスラム教徒が(正しき)イスラム教徒ではないことを。彼らは、これほどまでにと思われるほど、迷信的であり、偶像崇拝的である。私は、この変質の原因について云々しようとは思わない。今日のイスラム教徒は、その弱さから他人を模倣し、感染から自らを守るすべを知らないできた。自業自得である。(『ヨーロッパとイスラム』1987年、182頁)
- イスラムの教えは中国、そして残りのアジアにおいてもまた、相当に拡大している。イスラムの教えがその麻痺状態を脱し、活力を取り戻す日が来る、ということを疑うイスラム教徒は一人としていない。それは二〇年後であるかもしれないし、二世紀後であるかもしれない。しかし、その日は来る。(『ヨーロッパとイスラム』1987年、183頁)

## イスラムの存在理由

- イスラムは、すべての人間に対して、唯一神を崇めるよう訴えてきた。この神はアダム、ノア、アブラハム、モーゼ、そしてキリストの神である。（『ヨーロッパとイスラム』1987年、181頁）
- それは、多くのキリスト教徒とユダヤ教徒がかれらの宗教を変質させ、そしてとりわけそこに化身の教義を導入したことである。イスラムは、かれらに対して、かれらの真実の教義に戻るよう促した。一言でいえば、イスラムが戦いを宣告したのは、すべての形態、仮装のもとにおける偶像崇拝に対してなのである。（『ヨーロッパとイスラム』1987年、181頁）

## ムハンマド・アブドゥにとっての近代

- イスラム以上に武装し、その数もより多く、その力もより強かった、偶像崇拜者たち、ユダヤ教徒たち、そしてキリスト教徒たちは、イスラムに向けて恐るべき突撃を加えた。しかし、イスラムとともに、真理は輝く星のように姿を現わした。(『ヨーロッパとイスラム』1987年、181頁)
- その(イスラムの)光線は、人間の頭脳の最も暗い隅々にまで浸透した。すべての民族、すべての国家から、確信に満ちた人間たちが、その教義を信奉するために、群をなして駆け付けてきた。かれらの知性を曇らせていた迷信を取り除かれ、かれらの首長、教会の軛から解き放たれ、かれらの知的独立を取り戻して、かれらは、その同胞たちの解放に努め、永遠の源泉から「真理」を汲み取った。壮大な飛躍が人間たちをして、知ること、見ること、経験することに導いた。ギリシア、ローマ文明の後継者として、かれらは、重要な諸発見に色とられた勤労の数世紀の果実によって、その貴重な遺産を豊かにした。(『ヨーロッパとイスラム』1987年、181頁)

# キリスト教と近代文明

## ムハンマド・アブドゥの「近代」文明批判

- われわれが読み、理解するところでは、福音書はキリスト教徒に対して、この世の利害から超脱し、正しく単純な人生を送るよう、また、悪に悪をもって報いないよう命じるとともに、常に野心的で攻撃的な富める者を非難している。つまり、福音書は、この点に関して、ラクダが針の穴を通過する方が金持ちが天国に入るよりも容易である、と述べている。この称賛すべき教義は、それを告知した神の使徒にふさわしいものであり、その内容を要約するならば、永遠の生命を獲得するためにこの世から超脱せよ、ということになる。（『ヨーロッパとイスラム』1987年、168頁）
- 翻って、もしわれわれが宗教の性格をその信条から判断しなければならないとするならば、われわれは、現行文明とキリスト教との間にはいかなる関係も存在しない、と述べるだろう。・・・福音書のなかで述べられているなにものをも、アノー氏がわれわれに語るアリア文明のなかに観察することはできない。そして事実もまた、そのことを我々に証拠立てている。（『ヨーロッパとイスラム』1987年、168頁）
- これらのこと(政教分離のキリスト教の教義)すべてについて、アノー氏は疑問をもっているようにはみえない。しかし、一瞬たりとも、かれがカエサルのもものはカエサルに返すべきことを心得ている、という事実が示されることはない。（『ヨーロッパとイスラム』1987年、168頁）
- しかし、それにもかかわらず、この文明(ヨーロッパ文明)はキリスト教と結びついている。実際、この文明は、すべてにおいて、権力、金、自惚れ、虚栄、偽善にその横斑を置いている。それは、一部の人々の間ではスターリング・ポンドの姿をとり、他の人々の間ではナポレオンの姿をとる。しかし、そのいかなる時においても、福音書は姿を現わさない。（『ヨーロッパとイスラム』1987年、168頁）

# ガブリエル・アノー(1853-1944)のイスラム観

- フランスは、四千万の人口からなる、自ら以外に手本をもたず、王朝や世襲の首長を戴かない共和政体をとる民族であるが、このかれらこそ、おそらくほどなくその数において自分たちと拮抗するようになるであろうもう一つの住民、巨大な空間に拡散し、未知の風土のもとに生活し、われわれ自身に従っているそれとは全く異なる本能、伝統、規則に従って、すでに過去のものとなっている生き方を続けているもう一つの住民の指導を引き受けた民族である。そして、このイスラム教徒、セム系住民に対して、いまやこのアーリア系、キリスト教徒、共和派の民族は、生命と文明のパンと塩をもたらさなければならない。  
(『ヨーロッパとイスラム』1987年、151頁)

アノー(1853-1944)



## ムハンマド・アブドゥのアノトー批判

- 私は、アノトー氏の研究を、政治の観点から判断しようとは思わない。私は、自国の立場と自国の他国との関係を無視することができず、結局のところ、いついかなる時においても、寛大で人間味あふれるしきたりを守り続けねばならない元外務大臣、外交官に関心などない。私は、御自分の諸論文の評価をアノトー氏御自身に委ねよう。宗教的憎悪をかきたて、中世の司祭のようにイスラムに対する聖戦を説教することが、かれにとって祖国に奉仕することになるのか、私はその決定をかれの分別に一任しよう。私がここで意図しているのは、ただ単に、フランス式教育を身につけ、フランスとアノトー氏の政治体系に余りにも引きつけられている私の若き同胞たちに、よく考えるよう注意を促すことだけである。かれらはそこに有益な教訓をみつけるだろう。（『ヨーロッパとイスラム』1987年、184頁）



## 2. 分裂するイスラム思潮 近代派と復古派



アリー・アブドゥルラーズイク(1888-1966)



ラシード・リダー(1865-1935)

## アリー・アブルラーズィク(1888-1966)

(アリー・アブルラーズィク『イスラムと統治の諸原則』1983年、44頁)

- 真実は、この野心、恐怖、華美、強制がしみ込んだカリフ制についての誤った観念はイスラムとは何の関係もない、ということである。カリフ制は神聖なる企画とは関係がないが、同じことは、公正な行政、政府や国家のその他の機能についても言える。これらは、宗教が関心を持たぬきわめて政治的な企画である。イスラムはこれらを認めも、非難も、禁止もせず、われわれが理性、国家の経験、政治の規則に基づいて判断するがままにさせている。・・・宗教は、ムスリムに対して、社会や政治に関する科学において他の国家(の人びと)と競うことを禁じてはいない。ムスリムが、その採用以来、かれらを貶めつづけてきた古き組織形態を排するのに、何の障害もない。ムスリムは、人類の精神の近年の到達点と、健全な政府の原則からして最も有益であることが示された国家の経験と完全に調和した形で、自由に王権と政府の規則を打ち立てることができる。

## ラシード・リダー（1865-1935）

（ラシード・リダー『イスラム国家論』1987年、107－8頁）

- イスラム世界（ダール・イスラム）とそれに対応する戦争世界（ダール・ハルブ）はよく知られており、両者については規定も多い。また、カリフ制の規定に関してウラマーから引用するなかで、「公正の世界（ダール・アドル）」にもいくどか触れた。これは、正当な元首がその職に就いていて、公正が確立されているイスラム世界である。このように命名されたのは、「不正と不義の世界（ダール・バギー・ワ・ジャウル）」の反対語としてである。・・・公正の地においては、善行に関して元首に服従することは、心身両面におけるイスラム法上の義務であり、元首の命に反することは、命令の内容が、イジュティハードやタクリードのレベルではなくてコーランまたはスンナの明文によって背信（イスラム法違反）とされているような行為でないかぎりには、許されない。ムスリムのなかでこの元首に背く者、あるいはこの元首のいる地において力をもって墮落を広める者に対しては、イスラム法上義務とされている他の戦いと同様に、戦わなくてはならない。

### 3. イスラム思想の大衆化 ムスリム同胞団の結成



ハサン・バンナー (1906-1949)



『高等師範学校75周年記念年報(1872-1947)』に掲載された写真。「ムスリム同胞団の最高指導者(ムルシド)」と紹介されたうえで、略歴が述べられている。

## ハサン・アルバンナー（1906-1949）

（ハサン・アルバンナー『ムスリム同胞団の使命』（池田修訳）アジア経済研究所、昭和44年、19頁）

- 兄弟よ、さあ聞いてくれ。我々が唱導するものは、イスラーム主義 (islamiyah) という一言がその性格を語る、一種の呼び掛けである。このイスラーム主義という言葉には、人々が理解しているような狭い意味のほかに、もっと広範な意味がある。
- 我々は、「イスラームとは、生活領域全般を秩序立て、そのすべてに、合法的見解 (futwah) を示し、精妙にして当然の制度を確立するという包括的異議である」と、信じている。それは、人間に寄与するために欠くことの出来ない生活上の問題や、制度の前では動きがつかないというような性質のものではないのである。
- ある人々は、イスラームは、若干の宗教的習慣 (ibadat) か、精神主義 (ruhaniyah) の修業に限定されるものだ と誤解している。彼等は、自己と、その理解するところを、この限られた狭い領域にとじこめているにすぎない。しかし、我々は、イスラームを、これとは異なり、現世および来世における萬事を秩序づける一層広範なものとして理解しているのである。と言っても、決して我々が勝手にそのような仮面を着せているのではなく、また自分勝手に、拡張解釈しているのでもなく、そのことこそ、我々が神の経典 (コーラン) や、昔のムスリムの伝承 (sirah = 通常マホメット伝のこと) から理解したことなのである。